HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	町衆と文芸 : 近世初期における堂上と地下との関係をめぐって [全文の要約]
Author(s)	工藤, 隆彰
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第12955号
Issue Date	2018-03-22
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/70209
Type	theses (doctoral - abstract of entire text)
Note	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。
Note(URL)	https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
File Information	Takaaki_Kudo_summary.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

博士論文の要約

工藤　隆彰

本論文は、近世和歌史の研究で解明が求められている堂上と地下との関係を、町衆と称される富裕な商工業者階級の文芸活動に注目して論じたものである。

近世という時代を身分社会、堂上と地下との間の壁が高いとする先入観は根強い。しかし、地下の存在である町衆達は、中世後期から連歌を介して堂上の人々に接していた。そして近世初期には蹴鞠や茶の湯等でも同様の状況が看取できるとともに、このような他の文芸での親交を経て、和歌に関しても堂上の人々と繋がりを有するに至った者が散見される。斯くの如き活動を展開しながらも、従来文学史の上では等閑視されてきた人物達を詳しく取りあげて、近世初期における堂上と地下との交流や影響関係の一端を具体的に示すことを試みた本論文は、緒言・結語と以下の全六章によって構成されている。

第一章「「牡丹花的伝弟子」伊予屋宗珀」では、伊予屋宗珀を取りあげた。まず、肖柏に師事する連歌作者として交流を結んでいた三条西実隆の記録、また古今伝授の系譜を示す資料等から、宗珀の素性や活動を明らかにした。その上で、今まで同一人物と見なされてきた茶人の「天王寺屋宗伯」は、別人と考えられることを指摘した。さらに、従来肖柏の門弟として重視されてきたのは宗訊であったが、肖柏からの古今伝授(堺伝授)を拡散させたのは宗珀の門流であり、近世初期に松永貞徳の門人達が肖柏の門弟の筆頭に位置付けていたのも、宗珀であったと考えられることを示した。

第二章「千利休の文事 ―中世末期の茶人と連歌―」では、千利休及びその周辺の人々を取りあげた。利休の文事を論じた従来の研究が、里村紹巴・日野輝資をそれぞれ連歌・和歌の師と見なしていること等に疑問を呈し、そもそも利休は連歌・和歌に関わったと判断できる記録が乏しく、むしろ狂歌・俳諧を好んで行っていたと考えられることを指摘した。その一方で、辻(墨屋)玄哉・津田(天王寺屋)宗及等は、連歌の張行や古典学の指導、そして茶会を介して紹巴と親交を結び、また連歌作者として三条西家等をはじめとする堂上の人々と交流していたことを示した。

第三章「灰屋紹由・紹益試論 ―近世初期における堂上と地下―」では、灰屋紹由・紹益父子を取りあげた。紹由については、連歌作者として里村家の連歌師達や堂上の人々と数多く一座しており、殊に八条宮智仁親王とは両吟百韻を行うまでに至っていたことを明らかにした。そして、歌人であった紹益も、堂上の人々との間に類を見ない程の篤い親交を築いていた事実を示しつつ、その背景として紹由が連歌によって築いた人脈の一部を引き継いでいたこと、自身でも和歌に留まらず蹴鞠や茶の湯を介して堂上の人々に接していたことを指摘した。

第四章「本阿弥一族と灰屋紹益 ―吉野太夫の逸話における「父」と「一門」をめぐって―」では、井原西鶴『好色一代男』の一章の典拠でもある、紹益が近世随一の遊女・吉野太夫を妻とした折の逸話を取りあげた。件の逸話において紹益を「勘当」する「父」と「一門」は、今まで養父である紹由及びその一族と解釈されてきたが、「父」は実父で

ある本阿弥光益、「一門」は本阿弥一族を指すものと考えられることを指摘した。それとともに、従来注目されてこなかった光益の茶人としての活動や、徳川義直をはじめとする尾張藩の人々との関係、一族における立場を示した。さらに、紹益は紹由の養子になった後も光益及び本阿弥一族と接触しており、密接な関係を保ち続けていたことを明らかにした。

第五章「灰屋紹益と古今伝授」では、紹益の古今伝授に関わる活動を示す『にぎはひ草』及び『古今和歌集相伝之弁』の内容を取りあげた。他の関連資料に照らし合わせると、『にぎはひ草』に記されている「きうじん」から本阿弥光悦への伝授は疑わしい部分が散見され、事実とは考え難いものの、同じく『にぎはひ草』に記されている紹益自身が飛鳥井雅章の指導の下で光悦書写の古今伝授の箱を拝見するまでの経緯、また『古今和歌集相伝之弁』に記されている紹益から徳川光友への古今伝授の経緯等に関しては、不自然な点が少ないことを示した。

第六章「寛永文化期の鷹峯」では、光悦が住んだことで著名な鷹峯の環境を取りあげた。同じく鷹峯に住んでいた光悦以外の本阿弥一族や野間玄琢・三竹父子の周辺も重視することで、鷹峯は堂上・地下を問わず、近世初期を代表する歌人や漢詩人達が多数訪問していた事実を明らかにした。そして、鷹峯には京都所司代板倉家及びそれに近侍する文化人達が度々訪れ、同じく板倉家と関わりが深い本阿弥一族・野間父子に迎えられて詠作や茶事に興じていたことを示し、鷹峯は京都所司代板倉家の「文化人サロン」による、文芸活動の一拠点として位置付けられることを指摘した。

本論文で重点的な研究対象とした灰屋紹益の諸般の活動は、和歌や古典文学をめぐる堂上と地下との関係を具体的に示す例として重要なものであるが、彼でさえも従来の近世和歌史においては顧みられることがなかったように、その活動の意味が未だ理解されていない歌人達は他にも存在すると考えられる。近世和歌史の実態を明らかにするためには、今後も彼等を見出して情報をさらに積みあげた上での分析が必要である。